

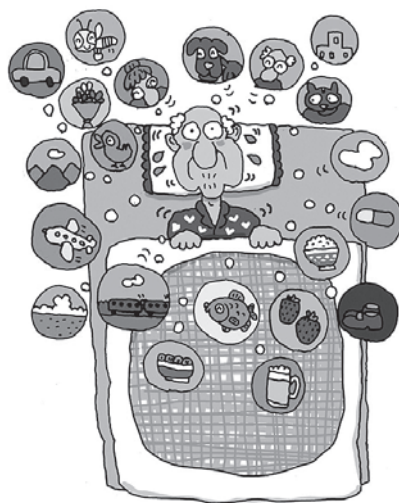
人生
山あり谷あり

第 73 回「忘れられない」

名古屋大学名誉教授 いぐち あきひさ
愛知淑徳大学教授 井口 昭久

多くの高齢者は何らかの薬を飲んでいる。
「薬を飲むこと」は重要な日課であるが、必ずしも決められた規則に従って飲んでいる人ばかりではない。
飲み忘れる患者は多い。
だから突然の医者への休診でも慌てることはない。その日のために？薬を蓄えているからである。
その中に飲み残しが全くない患者の一群がある。
睡眠薬を常用している人たちである。
眠れぬ怖さから逃れるために毎晩欠かさず睡眠薬を飲んでいたので彼らには余っている薬はない。
睡眠薬の投薬期間は日数が定められているので、医者は規定以上に投薬することはできない。
だから医者の突然の休診は不眠に悩む患者にとって迷惑である。
記憶障害は認知症に怯える現代の老人にとって気になることである。
一方で記憶には「忘れられない」という危険な側面がある。
老人を悩ますのも「忘れられない記憶」である。
記憶は昼間の生活ではなくてはならない好意的な補佐人であり、親友である。
しかし夜になって眠りが訪れないときには記憶の危険な性格が明らかになる。
眠りは一時的な忘却であり、その恵みをえられない人は記憶の世界から逃げ出すことはできないからである。
布団に寝たまま、眠ることができずにいると、記憶が大きな支配力を発揮して様々なものを延々と思い出させ、憂鬱な気分になせ、眠りから遠ざける。
眠れない夜に悪い記憶が一旦出現すると、まるで残酷な映画のような映像が次から次へと浮かんでくる。

それは抑えきれない不整脈のように出現し続ける。
不整脈には種類に応じて対応する薬剤がある。しかし記憶には抑える薬がない。
記憶を抑えることができるのはただ一つ睡眠だけである。
しかし特定の記憶だけを消すことはできない。
記憶は人生の中で最も扱いにくいものである。
「青年は夢とともに生き、老人は思い出とともに生きる」
これはサミュエル・ウルマンが言った有名な言葉であるが、老人を悩ますものも記憶である。



支部だより 首都圏支部総会

2023年
7/8(土)

令和 5 年 7 月 8 日 (土) の夕方、学士会館にて名古屋大、学医学部学友会首都圏支部総会が行われました。まず総会は田中輝幸先生 (S62 年卒) が司会のもとで、真野俊樹先生 (S62 年卒) による支部長挨拶と先日鶴友会館で行われた評議員会の報告が行われました。次に、堀川和裕先生 (S61 年卒) による事務局報告、そして田中輝幸先生 (S62 年卒) からの監査報告が行われました。総会の後には招待公演が行われました。まず、東海国立大学機構理事、名古屋大学統括副総長の門松健治先生より『名大医学部と東海国立大学機構の未来』という演題で、名古屋大学医学部で行なっている研究などにおいて、他分野との連携など現在行われている新たな取り組みについてお話しいただきました。次に前厚生労働省事務次官の吉田学先生より、『2040 年を展望した医療の姿 (認識共有のために) ～3 課題と DX～』という演題で、厚生労働省にいらっしゃった立場から今後の日本の医療についてお話しいただきました。そして懇親会の後閉会

となりました。この首都圏支部総会では、特に若手などより多く参加者を募集しているそうです。次回は、2024 年 7 月 13 日に開催される予定です。

(文責：成田)

